

公立入試はどう変わったのか その3

従来の作問傾向は、基本的な必修事項の羅列です。すなわち英語ならば教科書にでてくる基本構文と連語を覚えているかどうか、理社ならば1問1答形式の問題集にあるような、広くて浅い知識を習得できるかどうかを問うものであり、まさに「基本知識を覚えている」ことが優秀さの基準であったように思います。

今回の変更点を科目別（数学以外）に見ていきましょう。

まず社会は公民の分野で、資料の表からグラフや図を作らせる「作業」を入れていました。これは問題文が読めれば誰でもできるまさに「事務作業」ですが、1問1答にしか慣れていない受験生はこうした実務的な課題に相当面食らったと思います。

理科では、従来からグラフ図表を読み取らせる問題はあったものの、社会同様にデータのグラフ化をさせたり、図の意味を正しく把握しているかを確認したりする設問は目新しいものでした。図表から読みとって「使えるか」が最も重要なのですが、地震波・柱状図・回路図・湿度表と今回の作問はその点から言っても非常によい問題であったと思います。

さらに英語では、従来の英作文から日本語が消えました。つまり「次の日本語を英訳しなさい」ではなく、「次の会話が成り立つように英文を書きなさい」というものになったのです。受験生はその前後の会話文から、どういう状況で会話が進んでいるのかをイメージしなければならず、話の流れを読めない生徒にとっては全く手が出せなかったかもしれません。さらに長文問題でも要約文に適語を入れさせるなど、英文全体を把握する力を特に要求してきたと思います。

最後に国語は他教科と比べ大きな変更はありませんが、語意や適語を選択させる設問の選択肢がやや難しくなったように感じます。単なる文法の知識よりも、よく似た言葉の違いや正しい使い方など、言葉に対する感性が鋭い生徒に有利な作問になっています。

以上5科目の新傾向を見てきましたが、もちろん全体の8割は従来通りの傾向で作問されています。従って高校のレベルによってはこうした新傾向問題の正誤が受験の可否に影響しない場合もあるでしょう。しかし上位校になれば従来通り高得点が要求され、この新傾向問題も避けては通れません。

ただ単に知っているかではなく、その内容が使えるか、イメージができるのか、言葉が豊かなのか、指示通り正しく作業ができるのか、解法の筋道を自分で立てていけるのか。

これらが、県教委の掲げるこれからの時代の若者に要求する「賢さ」の質だと思えます。これはなかなか面白い改革だと思います。

高森1学期中間テスト塾生平均点

学年	英語	数学	国語	理科	社会	5科合計
中1	99.7	93.3	93.3	76.3	83.3	446.0
中2	83.9	93.0	81.6	91.0	88.0	437.4
中3	92.3	97.0	76.0	86.3	80.5	432.0